

ある愛の風景

2007(平成19)年11月14日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★★



第1章

映画は監督で観る！

監督＝スサンネ・ビア／出演＝コニー・ニールセン／ウルリッヒ・トムセン／ニコライ・リー・コス／サラ・ユール・ヴェアナー／レベッカ・ログストロップ・ソルトー／パウ・ヘンリクセン（シネカノン配給／2004年デンマーク映画／117分）

……目下、日本では対テロ新法案が焦点だが、デンマークは700名もアフガンへ派兵していたことを知ってる……？ そんな前提の下、『エデンの東』を彷彿させる兄弟の確執が描かれ、さらに家族の絆の崩壊とその再生の様子が感動的！ 2本続けて観たデンマークの女性監督スサンネ・ビア監督の映画は最高！

人口550万人のデンマークですら……

衆参のねじれ現象の下、わが日本国は中断しているインド洋での給油活動を再開させるための新テロ対策特別措置法案をめぐって大揺れ状態。かつて、湾岸戦争の時日本は、1990年から91年にかけて計130億ドルを拠出したにもかかわらず、アメリカを中心とする参戦国から金だけを出す姿勢が全く評価されなかったことは記憶に新しいところ。その反省のうえに、日本はアフガン紛争、イラク紛争についてはそれなりの国際貢献を果たしてきたが、今なお国際貢献はどうあるべきかという一般法が制定されていないのが現状……。

ところで、人口1億3000万人の日本に対して、人口550万人のデンマークはアフガンに対してどんな国際貢献を……？ そんなことを知っている日本人は100人のうち1人もいないだろう。しかし、この映画を観ればそれがよくわかるはずだ。そう、『ある愛の風景』はエリート兵士（少佐）である主人公ミカエル（ウルリッヒ・トムセン）に対して、戦火のアフガニスタンへの派遣が命じられたところから物語がスタートする。ちなみにネット情報によれば、デンマークがアフガニスタンに派遣している部隊は700人。その中にはきっとミカエルと同じように犠牲者となった兵士もたく

さんいるはず……？

主人公は対照的な2人の兄弟

対照的な2人の兄弟が主人公という設定の映画は、『エデンの東』（55年）におけるアーロンとジェームズ・ディーン扮するキャルをはじめとして数多い。これは聖書の創世記に記されたカインとアベルという2人の兄弟の葛藤と人類初の兄弟殺しを念頭におきながら構成されたストーリー。

女性のスサンネ・ピア監督がなぜそんな男兄弟の設定を思いついたのかはわからないが、アフガン戦争へのデンマークの関与と、その中で必然的に生まれてきた家族の絆の崩壊そして再生、そんなテーマを想定すれば当然に行きつく設定……？

ミカエルは美しい妻サラ（コニー・ニールセン）とかわいい娘ナタリー（サラ・ユール・ヴェアナー）とカミラ（レベッカ・ログストロップ・ソルトー）に恵まれたエリート兵士だが、家庭内でも、やさしい夫であり父親という理想的な人物像。アフガンへの派遣が命じられた時、サラは「行かなくてもいいのよ」と言っていたが、ミカエルとしては任務の受諾は当然のこと。出発前夜の家族の夕食会に、かつての日本でよく見られた、召集令状（赤紙）を受けとった兵士が戦場に臨むような悲愴感がないのは、生命の危険という切羽詰まったものがないため……？

この夕食会に参加したのがミカエルの弟のヤニック（ニコライ・リー・コス）だが、彼は刑務所から出所してきたばかりで定職もなく、家族とりわけ父親からは「お前は人間のクズだ」とまで嫌われている存在。こんな設定は、『エデンの東』の兄弟と全く同じだが……？

あっさりヘリが墜落したが……？

戦場での軍人の死亡を家族に知らせるシーンは『プライベート・ライアン』（98年）や『ワンス&フォーエバー』（02年）などたくさんあるが、そのシーンはそれぞれ人間の本性に迫るものだけに興味深い。とりわけ『ワンス&フォーエバー』では、軍人の死亡を伝えるイエローキャブ（タクシー）が自宅の前に到着した瞬間の妻の不安げな表情がすばらしかった（『シネマルーム2』103頁参照）。

この映画では、開始早々（約15分後？）にミカエルが乗ったヘリコプターが撃墜されたことを受けてそんなシーンが登場するが、さてスサンネ・ピア監督の演出は如何

に……？ ここで、「あなたのご主人は○月○日、△△において名誉の戦死をされました」と報告させ、これを静かに「わかりました」と聞いたうえ、1人ベッド上で泣き崩れる妻、という演出も考えられるが、スサンネ・ピア監督の演出はその正反対。是非そんなシーンに注目を！

第2の注目点は、夫の戦死をなかなか受け入れられないサラの心理状況の演出。それは、たとえば今や全然必要ないはずの夫のワイシャツのアイロンかけに精を出しているサラの姿などで表現されているから、ここにも注目を……。

兄の代わりに弟や親友が……？

日本でも中国でも「貞女両夫に見えず」と言われたもの。しかし他方、日本では軍人が特攻隊として出撃するに及んで、弟や親友に対し「俺の妻をよろしく頼む」と依頼するケースも多い。たとえば、『紙屋悦子の青春』(06年)では、明石少尉は永与少尉に「悦子をよろしく頼む」と言い残して出撃することに……。もっとも、今風の男女平等思想からみれば、これは女性の権利無視もはなはだしいと怒られるところだが、日本ではそんなケースがたくさんあったことはまぎれもない事実……？

スサンネ・ピア監督によるこのデンマーク映画でも、兄のミカエル死亡後サラの心を慰め2人の娘を可愛がるヤニックが、ひょっとしてミカエルに代わってサラといい仲になるのでは……？ そう思われるシーンが続出する。飲み助で仕事もせず、心が腐ってしまっている弟と思っていたにもかかわらず、サラの家のキッチンのリフォームに精を出す姿や子どもたちとふざけ合う姿、そしてハラを割って話すと『エデンの東』の弟キヤルのように、実はヤニックも傷つきやすい繊細な神経の持ち主だったことがわかり、心安らぐサラ。そんな2人は、ついにある夜……？

ギラギラした目と極限の選択は……？

『アフター・ウェディング』(06年)の評論で書いたように、スサンネ・ピア監督の映像の特徴はクローズアップ、とりわけ目や口の表情の極端なアップ。悲嘆にくれていたサラが少しずつ元気を取り戻していく様子が描かれていく中、時々ギラギラした目がスクリーン上に登場する。さてこれは……？

そう、たしかにヘリコプターは撃墜されたのだが、どんな飛行機事故でも全員死亡とは限らず、1人か2人は奇跡的に生き残る人がいるもの……？ それはブルース・

ウィリス主演の『アンブレイカブル』（00年）を観ても明らか……？ 実はあのギラギラした目は、今アルカイダの捕虜となっているミカエルの目だったというわけだ。

アルカイダの捕虜虐待がどんな実態なのかはもちろんわからないが、この映画の中では女性監督らしくない（？）厳しさで、同じく捕虜となっていた偵察隊の無線技師ニルス・ペーター（パウ・ヘンリクセン）との極限状態でのあるバトルが描かれる。さすがにそれをここに書くと、監督や宣伝会社から怒られるので伏せておこう。

ちなみに、あなたと親友の2人が海に放り出され、ゴムボートに乗れるのは1人だけ、そんな時あなたはどうする？ という質問に対する答えは、ホントにその極限状態に遭遇しなければ出せないはず……。そんな極限状態でミカエルがある選択をしたことが、その後の彼の人格を大きく変えてしまったのは明らかだが……。

戻ってきたミカエルは別人……？

奇跡的に救出されたミカエルは、今やっとなデンマークのわが家に戻ってきた。これを迎える家族たちは、ホントにうれしかったはず。死んでしまったと思っていた愛する夫が父が、そして息子がキズひとつない状態で戻ってきたのだから。しかし、外形上無傷であっても、ミカエルが心の中にどうにもならない大きな傷を抱えていたことが映画の後半少しずつ明らかになっていく。そしてそれをめぐる家族たちの葛藤が映画後半のテーマ……。

第1に、ミカエルはヤニックを含めて家族が仲良くしているのが気に入らないようだが、それは一体なぜ……？ 第2に、その象徴がヤニックがきれいにリフォームした台所だったようで、台所にあたり散らすミカエルの行動はかなりヘン……？ 第3に、ヤニックに対して「サラと寝たのか？」と質問するミカエルの真意は一体どこに……？ 同じ質問がサラにもぶつけられたが、その質問は本気？ それとも心の病が言わせているの？

第4に、おびえる娘たちに対してとってつけたように（？）「愛しているよ」と言ってもその効果がないことは明らかで、逆にちょっと難しい年頃になっている姉のナタリーは妹の誕生日パーティーの席である大胆発言を。そうなると、こりゃもう無茶苦茶……。

そんなこんなで、今やバラバラに崩壊してしまった家族の姿をスサンネ・ピア監督は徹底的にスクリーン上に描いていくが、これでは底無し沼状態……？

ニルス・ペーターの妻子を訪れたが……

ミカエルを深く愛しているサラは、帰国後のミカエルの変貌ぶりは1人心に悩みを抱え、それを誰にも打ち明けることができないためだと確信していた。そこで辛抱強く、「ねえ、話して」とやさしく語りかけていたのだが、ミカエルはそれに答えることはなかった。

そんな中、ミカエルはある日ニルス・ペーターの遺族を訪れたが、そこで見たのは1歳くらいの赤ん坊と一緒に暮らしながら夫の帰りを待つ若妻の姿だった。「自分と同じ捕虜だった」と打ち明け、「ご主人は死亡した」と言っても、妻からは「見たわけではないでしょう」と言われるとミカエルは「そうだ」と答えざるをえない。さらに、「だったら、きっと生きてはいるはずね」と突っ込まれると「きっとそう思う」と答えざるをえないことに……。

しかし、こんなニルス・ペーターの妻子との面会が、ミカエルの気持を徹底的に荒んだものにしたことはまちがいなさそう……。

警察出動の修羅場にまで……

次女カミラの誕生パーティーの夜、ついにミカエルのわだかまりは沸点に……。その夜1人台所に座っていたミカエルは今や憎悪の象徴となっているキッチンの棚を壊し始めた。大きな物音に驚いたサラが止めにいくと、ミカエルはサラを突き飛ばしたうえ、「部屋で待っている。殺してやる！」と絶叫したから、さすがにサラも真っ青。何とかケータイを持ち出し、ヤニックと警察に助けを求めたが、私もまさかこんな修羅場が訪れようとは全然予想していなかった。

先に到着したヤニックは取っ組み合いのケンカの末、遅れてやってきたパトカーの警察官たちに対して「ただの兄弟ゲンカだ」と弁明した。しかし、ここで警察官の拳銃を抜きとったミカエルがこれを警察官に突きつけたから、こりゃもうただではすまないことに……。そんな想像を絶する修羅場の結末は……？

心に残るラストシーンは……？

この映画のラストは、刑務所に収監されたミカエルを訪ねてきたサラとの対話シーン。弁護士の私がビックリしたのは、既決囚として収監されているミカエルとその妻



サラとの面会が、ガラス格子越しではなく、自由な空間（庭）でベンチに座りながらできるということ。もちろん、誰の監視もないままで……。これなら、面会者が収監者に脱獄用の道具を渡すことも可能だが……？

韓国映画『ユア・マイ・サンシャイン』（05年）のクライマックスは、この映画と同じく刑務所での面会シーンだった。韓国はガラスの窓を通してマイクを使って会話する方式だから、あの感動的な面会シーンを描けた（『シネマルーム11』257頁参照）が、こんなに自由な面会が許されるデンマークではそれはムリ……。もっとも、この際そんな法科大学院向けの論点はどうでもよく、『ある愛の風景』については自由に座ったベンチでの語らいのすばらしさに注目！

ここでサラが言うのは、今まで何度も言っていた「何があったか、話して欲しい？」ということ。これに対して、ミカエルは今までどおり「話さない」ときっぱり拒否。そこで、サラは「何も言わないなら、もう2度と来ない」と心に秘めた決意を告白したから、さすがにミカエルもこたえた様子。そこで、ミカエルは泣き崩れながら、次第にサラの胸に顔を埋めていくことに……。

そして、そんなミカエルの口から出た言葉は、「彼には息子がいたんだ。まだ赤ん坊だった」というもの。映画は、ここできっちりとおしまい。さあ、こんなすばらしいラストシーンをじっくり味わいながら、やっとミカエルにもあの忌まわしい記憶を抜け出し、人間として生きていく希望が生まれてきたことを実感したいものだ。

2007(平成19)年11月15日記

私の独断と偏見によれば、最近邦画の企画力と監督たちの才能は手詰まり気味で、これがデンマークに天才女性監督を発見！「アフターウェディング」(2006年)でのアカデミー賞外国語映画賞ノミネートで俄然世界的注目を浴びた「サンネ・ビヤ監督」だ。これもいいが、ある愛の風景」(2004年)はもっとすごい。アフガン戦争の際、日本は百二十億を拠出した

デンマークの女性監督に注目！



ある愛の風景

あすから梅田ガーデンシネマで公開



「ある愛の風景」の一場面

が、世界からの評価はまるでダメ。ところが、人口五百五十万人のデンマークは、何と七百人も派兵している。この映画は、アフガン戦争で捕虜となったミカエルの口からは、「エデンの東」(一九五五年)を彷彿とさせる物語、奇跡的に救出されたのは、愛慕セラの心はバラバラとなり、ある日怒りを爆発させた彼は逮捕されることになる。

「ある愛の風景」の一場面

「ある愛の風景」は、世界からの評価はまるでダメ。ところが、人口五百五十万人のデンマークは、何と七百人も派兵している。この映画は、アフガン戦争で捕虜となったミカエルの口からは、「エデンの東」(一九五五年)を彷彿とさせる物語、奇跡的に救出されたのは、愛慕セラの心はバラバラとなり、ある日怒りを爆発させた彼は逮捕されることになる。

「ある愛の風景」は、世界からの評価はまるでダメ。ところが、人口五百五十万人のデンマークは、何と七百人も派兵している。この映画は、アフガン戦争で捕虜となったミカエルの口からは、「エデンの東」(一九五五年)を彷彿とさせる物語、奇跡的に救出されたのは、愛慕セラの心はバラバラとなり、ある日怒りを爆発させた彼は逮捕されることになる。

「ある愛の風景」は、世界からの評価はまるでダメ。ところが、人口五百五十万人のデンマークは、何と七百人も派兵している。この映画は、アフガン戦争で捕虜となったミカエルの口からは、「エデンの東」(一九五五年)を彷彿とさせる物語、奇跡的に救出されたのは、愛慕セラの心はバラバラとなり、ある日怒りを爆発させた彼は逮捕されることになる。

大阪日日新聞2007(平成19)年12月28日